



Data

監督・脚本: 西川美和
原案: 佐木隆三「身分帳」(講談社文庫刊)
出演: 役所広司/仲野太賀/六角精児/北村有起哉/白竜/キムラ緑子/長澤まさみ/安田成美/梶芽衣子/橋爪功

👁️👁️ みどころ

『孤狼の血』(18年)のハチャメチャ刑事役で第42回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞した役所広司が、私の大好きな西川美和の脚本・演出の本作では、一転して更生と社会復帰を目指す出所後のヤクザ役に挑戦!

佐木隆三の『身分帳』を原案とし、時代を約30年ずらした脚本の出来は素晴らしい。『座頭市』も「アア・・・いやな渡世だなア・・・」と嘆いていたが、いくら「暴対法」が定着し、ハンシャ(反社)が生きづらくなったとはいえ、こんなまっとうな男(?)がもがき苦しむ姿を見ていると、何ともいやなご時世になったものだ。

コロナ禍の今、夜の銀座で遊び、謝罪の記者会見をするセンセイ方にも困ったものだが、それをもぐらたたきのように叩いて喜んでいるマスコミと国民の浅ましい姿にも困ったもの。あっちもこっちも、そんなご時世になれば、元ヤクザのみならず、すべての日本国民にとって、まさに世も末だが・・・。

———— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ———

■□■脚本も原作も! 西川美和監督のこだわりに拍手! ■□■

私は西川美和監督の『ゆるる』(06年)が大好き。『エデンの東』(55年)を彷彿とさせる、対照的な2人の兄弟の人間ドラマは、ストーリーとしてはもとより、「裁判モノ」としても興味深かったし、絶妙のタイトルにも感心した(『シネマ14』88頁)。デビュー作の『蛇イチゴ』(03年)は残念ながら観ていないが、その後の『夢売るふたり』(12年)(『シネマ29』61頁)、『永い言い訳』(16年)(『シネマ38』94頁)も、実によくできた映画だった。“東京2020大会公式映画”の監督に選ばれた女性監督・河瀬直美もオリジナルストーリーにこだわっているが、西川監督は彼女以上にこだわっている。そのため、『永い言い訳』では、脚本のみならず原作小説も書き、それが第153回直木賞候

補、2016年 第13回本屋大賞の候補になっているから、すごい。『永い言い訳』の主人公である、妻が死んで一滴も涙を流せない男・衣笠幸夫のキャラは、すべて西川監督の頭の中で作り出したものだ。そんなひねくれものの嫌な奴(?)を演じるのは難しいはずだが、さすが“もっくん”こと本木雅弘は見事に演じていた。

そんな西川監督が、原作をもとにした映画にはじめて挑戦したのが本作。その原作は、1900年に刊行された佐木隆三の『身分帳』だ。正確に言えば、それは原作ではなく、本作の原案小説で、西川監督は原作の時代設定を約30年後ろにずらす中で、オリジナルな脚本を仕上げている。

本作冒頭は、2017年2月20日。そこには13年間の刑期を終えて、旭川刑務所から出所する主人公・三上正夫(役所広司)の姿が登場する。韓国映画『親切なクムジャさん』(05年)、『シネマ9』222頁)で見たような、真っ白い豆腐を持ってお迎えに来てくれる人がいないのは寂しいが、2人の刑務官のお見送りを受けた三上が更生を誓っているのは間違いない。何でもこなす名優・役所広司は、3度目の日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞した前作『孤狼の血』(18年)、『シネマ42』33頁)ではハチャメチャな刑事役を演じていたが、それと正反対の本作では、どんな演技を？

■□■「身分帳」とは？この男のそれは？テレビ局の取材は？■□■

「身分帳」とは聞きなれない言葉だが、そんなタイトルにとことんこだわった佐木隆三は、同作でノンフィクション作家としての腕力をいかんなく発揮している。彼の代表作は『復讐するは我にあり』で、今村昌平監督が緒形拳、三國連太郎らを起用してそれを映画化した『復讐するは我にあり』(79年)は、第53回キネマ旬報ベスト・テン、第3回日本アカデミー賞を受賞している。「身分帳」(身分帳ノート)とは、受刑者の個人情報記されている極秘資料のこと。普通の受刑者なら、そのボリュームは知っているが、前科10犯の三上の身分帳は、すべて積み上げると1メートルを超す高さになったそうだ。

本作は、三上が出所するシークエンスに続いて、三上から送られてきた身分帳に興味を持ったテレビ局のプロデューサー・吉澤遥(長澤まさみ)が、この男を取材するべく、津乃田龍太郎(仲野太賀)に電話をかけるシークエンスになる。いくら身分帳(=履歴書)が面白いからといって、前科10犯の殺人犯を取材対象にするのは、放送に耐えられない。そう主張する津乃田に対して、吉澤は「そこが面白いじゃん。こういう人が心入れ替えて涙ながらにお母さんと再会したら、感動的じゃない？」と突っ込むと……。なるほど、やっぱり西川脚本は面白い。テレビ局に三上を送り付けた身分帳を転機に、一方では、うだつの上からない小説家(?)・津乃田の新たな人生模様が開始していくことに。

他方、もう二度と刑務所には戻らないぞと誓った三上は、身元保証を趣味にしている(?)ちょっと変わった老弁護士・庄司勉(橋爪功)の自宅で、妻の敦子(梶芽衣子)が準備してくれたすき焼きをご馳走になっていた。そこではゆっくり今後の身の振り方を相談するはずだったが、2人の心温まる言葉に感極まった三上は、思わず大声で泣き出すことに。

こんな姿を見ていると、13年間も刑務所に入っていた三上は意外にいい奴！誰でもそう思うはずだが・・・。

■□■ヤクザ映画2作が相次いで公開！■□■

2021年2月3日付朝日新聞は「社会の不条理 いまヤクザ映画で」の見出しで、本作と『ヤクザと家族 The Family』（21年）の2作を並べて紹介した。ヤクザ映画といえば、60年代の高倉健らが活躍した任侠映画から70年代の『仁義なき戦い』（73年）に代表される実録路線など、それぞれの時代を代表する名作が登場していたが、近時はめっきり少なくなっている。そして、同記事が取り上げた2本のヤクザ映画はたしかにヤクザ映画だが、その主人公は決してカッコいい任侠ではなく、社会から排除された“はみ出し者”になっている。

『ヤクザと家族 The Family』は、『新聞記者』（19年）（『シネマ45』24頁）で第43回日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した藤井道人監督のオリジナル脚本で、1999年、2005年、2019年の3つの時代を描くもの。その20年間で、19歳のチンピラだった綾野剛演じる主人公は、ヤクザの若頭補佐として活躍すると共に、13年間の刑務所生活を余儀なくされたが、2019年に出所してきた時の、ヤクザとヤクザを取り巻く社会の変化は大きなものだった。“ヤクザと人権”、そんな大層に振りかぶらなくとも、その変化の最大の契機になったのは、1992年の「暴対法」の施行。2009年からは各地で「暴力団排除条例」も制定され、ハンシャ（“反社”）というレッテルを張られた男たちは、生きていくこと自体が極めて難しくなっていた。

佐木隆三の原作は1990年に刊行されたものだから、「暴対法」の施行前。したがって、原作に見る主人公と、その原作から約30年時代を後ろにずらした西川脚本による本作の主人公・三上の立場（ヤクザとしての人権）は大きく違っているはずだ。西川監督が1992年の「暴対法」をどこまで意識して時代設定をずらしたのかは知らないが、同じ時期に公開された本作と『ヤクザと家族 The Family』が、たまたま同じ時期に生きるヤクザの生きザマ（死にザマ）を取り上げているのは興味深い。1968年の東大の第19回駒場祭で、「とめてくれるなおっかさん 背中の一ちょうが泣いている 男東大どこへ行く」がもてはやされたのは、まさにあの時代状況だったからだ。しかし、今や『ヤクザの家族 The Family』の主人公の背中に彫られた「修羅像」が何の役にも立たなかったのと同じように、本作に見る三上の背中の彫り物はまさに“無用の長物”。醜悪なだけだ。

■□■更生の道は？仕事は？収入は？やっぱり生活保護？■□■

『ヤクザと家族 The Family』では、13年ぶりに刑務所から出てきた主人公には、堅気になる気は全くなかった。しかし、本作の主人公である三上の決意が固いことは明らかだし、自宅で必死にミシンをかけている姿や、懸命に仕事探しをする姿を見ていると、彼の生真面目さがよくわかる。しかし、高血圧の持病があるため、庄司弁護士からとりあえず生活保護の申請を勧められた三上が、躊躇しながらその申請に挑む姿は面白い。福祉事

務所の窓口の担当者・井口久俊（北村有起哉）から質問を受けているシークエンスを見ると、「前科者」、「反社」の男に対する仕打ちの厳しさがわかる。庄司は、「福祉のお世話になるからって卑屈になる必要はない。国民の生存権なんだから」と割り切っていたが、昭和生まれの三上は、生活保護を受けること自身が肩身が狭くなるという感覚だったから、その意識の違いは大きい。

詳細はわからないが、生活保護の決定がなされたことは、その後、井口が定期的な家庭訪問に訪れるシーンによって明らかになる。しかし、その訪問時に、公衆電話から電話をかけている姿を見た井口が、「電話はいつもあそこですか？」と質問し、「はい」と答えた三上に対して、「携帯を持たれないんですね」と再質問すると、三上は「携帯を持ってもいいんですか。仕事を探すにも、公衆電話では不便で」と再質問。『ゆるる』でも『永い言い訳』でも、目立っていたのは、人間の心理を分析し、それをスクリーン上に表現するについての西川脚本、西川演出の丁寧さだが、それは本作のこのようなシークエンスで見事に表現されている。

本作には、出所後の更生を目指す三上を取り巻く人物として、前述した①テレビ局の吉澤と小説家（？）の津乃田、②弁護士の庄司とその妻の敦子、③ケースワーカーの井口、その他、④スーパーマーケットの店長・松本良介（六角精児）らが登場するが、西川脚本による、更生の道を必死で探る三上と彼らとの人間同士の絡みをしっかり味わいたい。

■□■見て見ぬフリが正解？イヤイヤそれはダメなはず！■□■

あなたは、2、3人のチンピラに絡まれて難儀している中年オヤジを偶然見かけたらどうする？そのまま見過ごすこともできるが、そうすればそのオヤジはカツアゲされて無一文状態で家に帰ることになりそうだ。そんな時に、(A) そのまま見て見ぬフリを決め込む、(B) チンピラからの反撃も覚悟の上、「やめろや」と割り込んでいく、の2択を提示された場合、(B) を選ぶ人はまずいはずだ。仮にあなたが空手やボクシングの有段者の腕前なら、ひょっとして (B) を選ぶかもしれないが、その場合は自分のケガの他、相手のケガも考えなければならず、刑事事件に巻き込まれる可能性もある。したがって、(B) を選択したいのはヤマヤマだが、ふつうは仕方なく (A) の選択をするはずだ。それはそれでわかるのだが、本作で庄司弁護士や松本が語るところによると、そんな場合は (A) を選ぶのが正解で、(B) を選ぶのは間違いらしい。しかし、本作のそんなシーンで、三上が取った行動は？

たまたまその時、三上に同行していた津乃田と吉澤が、(B) の行動をとった三上に驚いたのは当然だが、そこで怖がって逃げ出してしまった津乃田に対して、とことんカメラを向けて取材をしようとした吉澤のプロとしての執念が面白い。また、本作では安アパートの下の階で騒ぐ若者たちに苦情を言いに行った三上が、そこでチンピラたちとやり合う姿も登場するので、それにも注目！三上は背中に入れ墨こそ彫っているものの、格別優れた格闘技を持っているわけではないが、喧嘩をする上での口上と喧嘩殺法だけは心得ている

から、さすが元ヤクザだ。

ちなみに、『座頭市』シリーズでは、主演の勝新太郎が主題歌の『座頭市』を歌っているが、そこでは冒頭の「おれたちやナ、御法度の裏街道を歩く渡世なんだぞ。いわば天下のきらわれもんだ・・・」のセリフと、1番と2番の合い間の「アア・・・嫌な渡世だなア・・・」のセリフが入っている。私には座頭市のこの実感がよくわかると共に、庄司弁護士の言うとおり、見て見ぬふりをするのが正解だと（無理やり）納得しなければならない“このご時世”も、私には、「アア・・・嫌なご時世だなア・・・」と思えてしまう。2月17日には、銀座で夜遊びしていた自民党の国会議員のセンセイが「文春砲」のターゲットに挙げられ、「離党」の記者会見をしていたが、こんなニュースばかりがまかり通る、コロナ禍のこのご時世も如何なもの。それやこれやを考えつつ、「見て見ぬふりをするのが正解」という価値観がまかり通る昨今は、ホントに嫌なご時世だなア・・・。

■□故郷も昔仲間も良し！だが現実は何？タイトルの是非は？■□

本作の大部分は『すばらしき世界』というタイトルとは裏腹に、社会復帰にもだえ苦しむ続ける三上の姿が描かれる。その中で唯一の例外として登場するのが、電話一本掛けたきっかけで、即、九州の片田舎にある故郷に戻り、かつての“兄弟分”だった下稲葉明雅（白竜）の歓待を受けるシーケンスだ。周防灘の波音が聞こえる下稲葉の邸宅は立派だし、若い衆もいるようだが、小指のない手や、左足の膝から下がない姿を見ると、三上の“マラ兄弟”だという下稲葉の組の実態も底が知れている。そう考えると、お迎えの車も、ソープランドの接待も、そしてテーブルの上に並んだご馳走の数々も、ヤクザ特有の見栄そのもの・・・？それは三上もわかっているはずだが、久々の義兄弟との会話や、高血圧のためコトはできなくとも、九州特有の(?)優しいソープ嬢のサービスに、三上はご満悦。やはり故郷は、そして、昔仲間は良し！

ところが、そこに津乃田からの電話で、「まさかお仲間のどこ？やばいですよ。弁護士先生知ってるんですか、それ」と言われた三上は、「せからしか！お前がチンコロせんやったら済むことやろうもん」と切り返したが、「訛りが強くなってる。九州ですね？」と反撃されたうえ、「切らないで！お母さんのことですよ」と言われると・・・？その後に登場する、下稲葉宅に押し寄せている警察の車列を見れば、三上との再会もそこそこに若い衆と共に出かけて行った下稲葉の命運が尽きたことがわかる。下稲葉の妻（キムラ緑子）が必死に止めたことによって、そのいざごは見て見ぬふりをして東京に戻った三上は、津乃田の案内によって、子供の時に別れてしまった母親との再会を求めて、ある施設に入っていくことに。そこで、吉澤が期待していたような筋書きで“涙の再会”が実現できれば万々歳だが、残念ながら、現実は何？

刑務所暮らしの中で運転免許証すら失効してしまった三上が、再度それを取得するのが大変なら、やっと天職とも思えるような介護職員の仕事にありつくのも大変。刑務所暮らし13年の前科者のヤクザが更生し、このいやなご時世で生きていくのは、ホントに大変

なのだ。西川美和監督は、本作のタイトルを『すばらしき世界』としたことに大満足しているそうだが、私はその発想がよくわからない。私には、この世界のすばらしさではなく、いやらしさが目立つだけだ。そんな思いが募る中、いよいよ本作はラストに向かうが、その結末は如何に？この結末を見ても、本作はやっぱり『すばらしき世界』のタイトルがピッタリ？私は、違うと思うのだが・・・？

2021（令和3）年2月17日記